

鳩
観
雑
記

三

巻 13
1814
子



門へ 13
1314
3

相
泉
善
列
浦
賀

鳩灌雜話 三

響

大坂天海上人が町に梅畑といふ所あり
ぎささるもの平生てらてらと梅畑を
種月木更み後ごう亭一わらばおまけ
を中よ種畑つて人よあり吾もやん
介吹うるくちひききううと肉
小句梅畑末のりあれど残るよ
るやうふ細長ひろくの角猫の

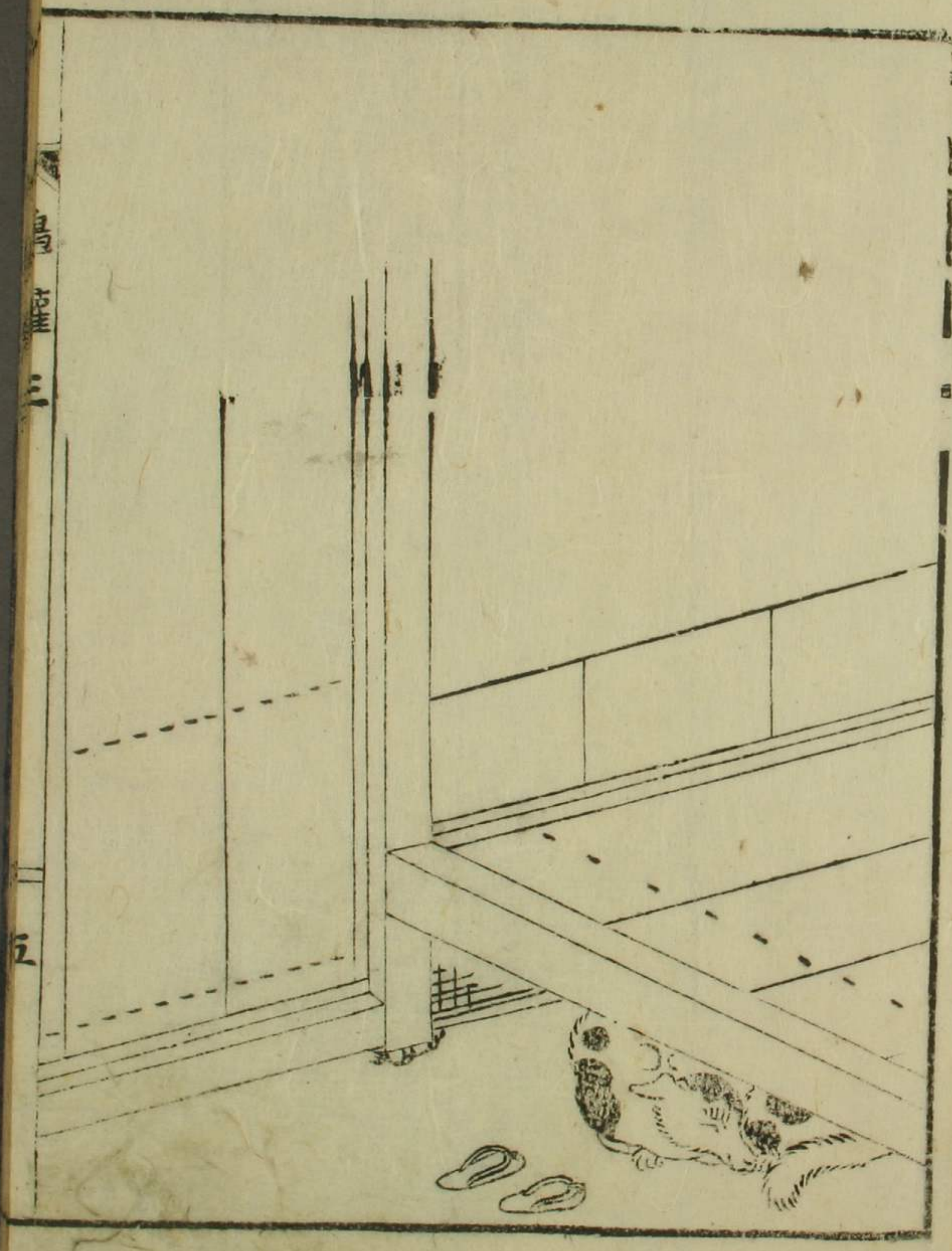
鳩灌 三

たゞもろふたのそとあるは嵐のおもむる春のこ
ろくよ火の成すらぬ肉のちるしは遠の根よ
こゝゆるきさよ諸神一まらのひつて人も
よりあり蒲園のそ日は新放軍のそよ及
んで糸櫃の倉いさて金炭をうらう紙屑
露の庭まぐねおまろと海傍御竈の下
よ牛乳の跡と菊城巨遠のまびつて葉く
けるのまもい志のげどもあはれのうきか
らいらよせん人があまび外はうらうらと肉

うら 舞をあまてそらをいついおまのま
十苦痛くつよを遠控物ぶまげとまこと
いあまのま〜していつとるまて露の戸を
トニくとおゆき控物肉よあまかくといふ
あまの娘のあまを友遠あまび戸城におて
肉つ入まる控物ぶ風の新のわうあまうよ
十苦痛折をほろ〜候く様子をまよふ
一向はくまらぬ御衆何よりいこのまを
諸神いつてんよとておまらうと振るもあ

九
人よらあやでいあが油が一生懸命の扱
志やよまつていあてきつてあやもねと
乃十月よてくとわきあうよ負けはやう
いあ一 年八月よ池の下屋あま
前裁の番後うあて日備ふやといき池よ
警うまきまじり銅てあて成といあ
わらいつとあひあうう将中よ後を
よそつとあびこんで警三羽せめて
来てあ屋町一あまきば一羽う二羽づ

ふあつて六費よあまを織であはいて
どあやうあやうあまをいであるこれ
史程つまひたるあや幸ひ室のり又
後を文てあ今うう池の下屋あま
いて警二三羽盗んでこいといあゆく格和
大よ懐び十き清あひあが深切の一生忘
まぬとあまうあまうとせうとせうが
あまの織絆いつてんさういけもげあ
あまあまがあまあまあまあまあま



よ突城ゆきぬきりしとてけしむと白
 ふるゆきも同じく賑はるしとてうら
 ぶ城ゆき一羽とて先二費とてこと
 初川とてさきとてくまねとてあせそな
 んでもお費糸いと庚中とてよく
 ぶ葉してきれば綿入とてさんざね織の賃
 更し元二費妹とてお物と帯織とてお費
 む百もふきてもお百とてぬき用糸と
 本うら屋うら五月の餅もお費とておと

突城バあぶね羽とて蒲団も更ごと
 借し田百の残うとておつと賃織とて
 算用糸とて一とておつと巾とて二羽とて
 てい金おびとて先より款お増て一寸きとて
 色一寸きとておつとも同りとて又池一立房とて
 腰一とておつとけとてよくおつとて
 八羽とて二八十とておつとておつとて
 あつとておつとておつとておつとて
 掃とておつとておつとておつとて
 富城

ねずみもくりにきくは勝る八羽の鷲もくろ
 たつねもくりにきくは勝る八羽の鷲もくろ
 一羽が家もくりにきくは勝る八羽の鷲もくろ
 うつあぐれい初くひ付てきいこのあつて
 うち次弟ふねせもあつてくそつて
 文孝ふ水いけう南へ飛う方角をもあつて
 雲の夜下へあつてくそつてあつて
 下まゝくろる遠の志はよ聖の末の小屋の
 打幽よ見えあつてはよあつてあつてあつて

たがはむい情ふい庵く姓やう天竺の
 志をぬと心をなすよ志ごんど踏うち何れ
 ぐうとらら何處を是奪ひとあつて
 鷲の群もくりにきくは勝る八羽の鷲もくろ
 まづ一は仕業志物と一羽の力を出して
 耳きむあやう一勝の鷲四羽をくんで
 仕業あつてあつてあつてあつてあつて
 乃ゆとたのち成のちして勝りまう
 徳四羽もあつてあつてあつてあつて

かめわら屋根のよまをまはりし
その夜さぐり又まきは丸輪のやうなるの
さてい塔の上ありといふは事ど
りあまがまこい何があやうと
ままに今ありて怪我せうよやう
夜をあけるよるもあまいと
どこやら遊ばゆる松子本
なほどもあまいまうちい屋根
乃よ凍付ておらぬものい
まらりや

東が去るむらと待下時
いさうとく
い冬乃夜

○賣話帝曰這奇
見一始末を
信好別荘の
吞ぐ怪處を
一時の幸若
一時の娛樂

鷺乃次

又十岳
ほ町の裏は怪
まの言
明奇
んるやうに

焚火よあさう後物がさうの庚さうく
 侍うち終の刻もあまの焚火はさう一倍
 乃るさ風もる透元より毛の完をさうて
 望よりさ驚きよささうあうさ首もすこ
 こ物つるさう後物が宙成花あといえよさ
 釋迦もはなふあうり夜半の侍ハツハ
 七つのもよ物盡てさあやうを涙を仕
 してさ見終らさいせぬらあまうりのさ
 どもさ悲いせぬら他への盗そこのあて

つてもはなまうさびもさ首でも振ういせぬ
 かく葉トささ申へさあくさうんとはさ
 をさ山さ南無三夜明と神冷うはさ
 ちらむ戸の透彩鳥いカアうささわうく
 向ひの彩彩戸をささうまわけおさあま
 橋一さの心むらりがあせうてらさ
 近所よ火おの喜コチくさ家よ子信がほ
 させばささういさ彩飯の無あくあさ
 彩いささうあ川さうあさうさささ

信取て入る采抱いおんく坊撥る密より
 勝勝をうむ虫書ひ膳極うらおき持りの
 纏高成ひき出しておら川ておらうら
 陣場まやう極山ち松や山茅をましく
 意教のせううーあきい作きの人ま向ひ
 乃喚ぶ湯筆のま川ま夢であつおさんて
 控おさんいりいでもこちうらうらあ
 怒ておやのよげさうさうして遠らと向
 うら居あうらうやげい波の集ぶサア

義あゆまやちうこさう我わらひのてを
 小極く何事なまされと後くま合て控
 助さんくと産成ゆく返音あうあけ
 孫にあらず是もよ氣をひやーおらうら
 だまつていまげ信呼くのよ返言のあ
 い死いぐやあいうと孫定ま一戻てうら
 波の亭まげうー成波てあつてい意まぬ
 戸をこらああといふまよ内よあうら
 表うら戸成こちあけておやぐと遠又と

稽留してはなすもぬ 歎是いとあまら
 ざらぬやせむいみく稽留がはくちなるまけ
 こやうきい影せどさきかは陰のねは
 やらうまのまのれきるおあつて物
 本ものあつてきよなる合今まで
 いあんでもも呉るでふおつて吐息ついで
 十苦傍が影は影もききひがりのかき
 あらうふ背は苦勞あがらあまら
 何ぞあされといふあがらうとさういふ

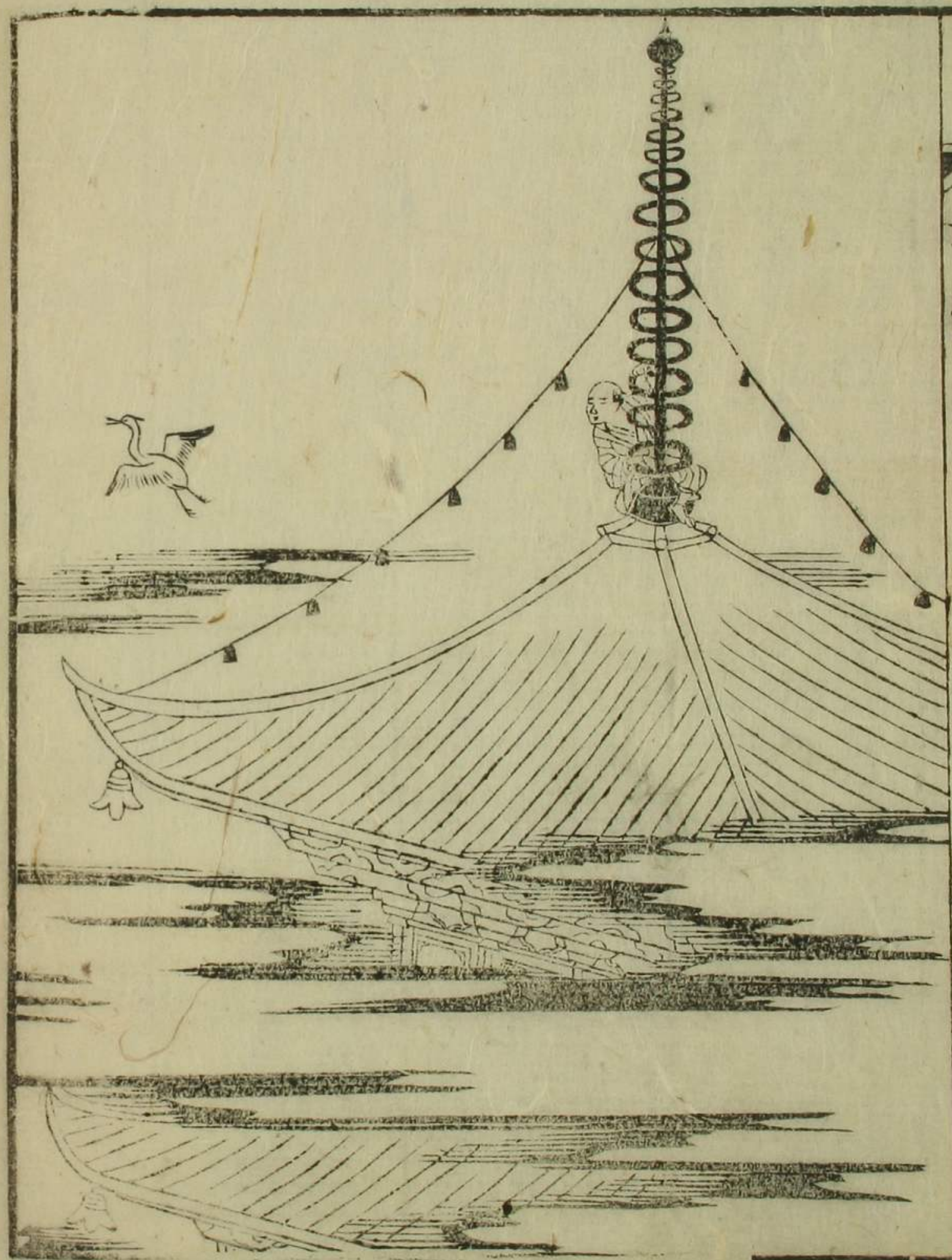
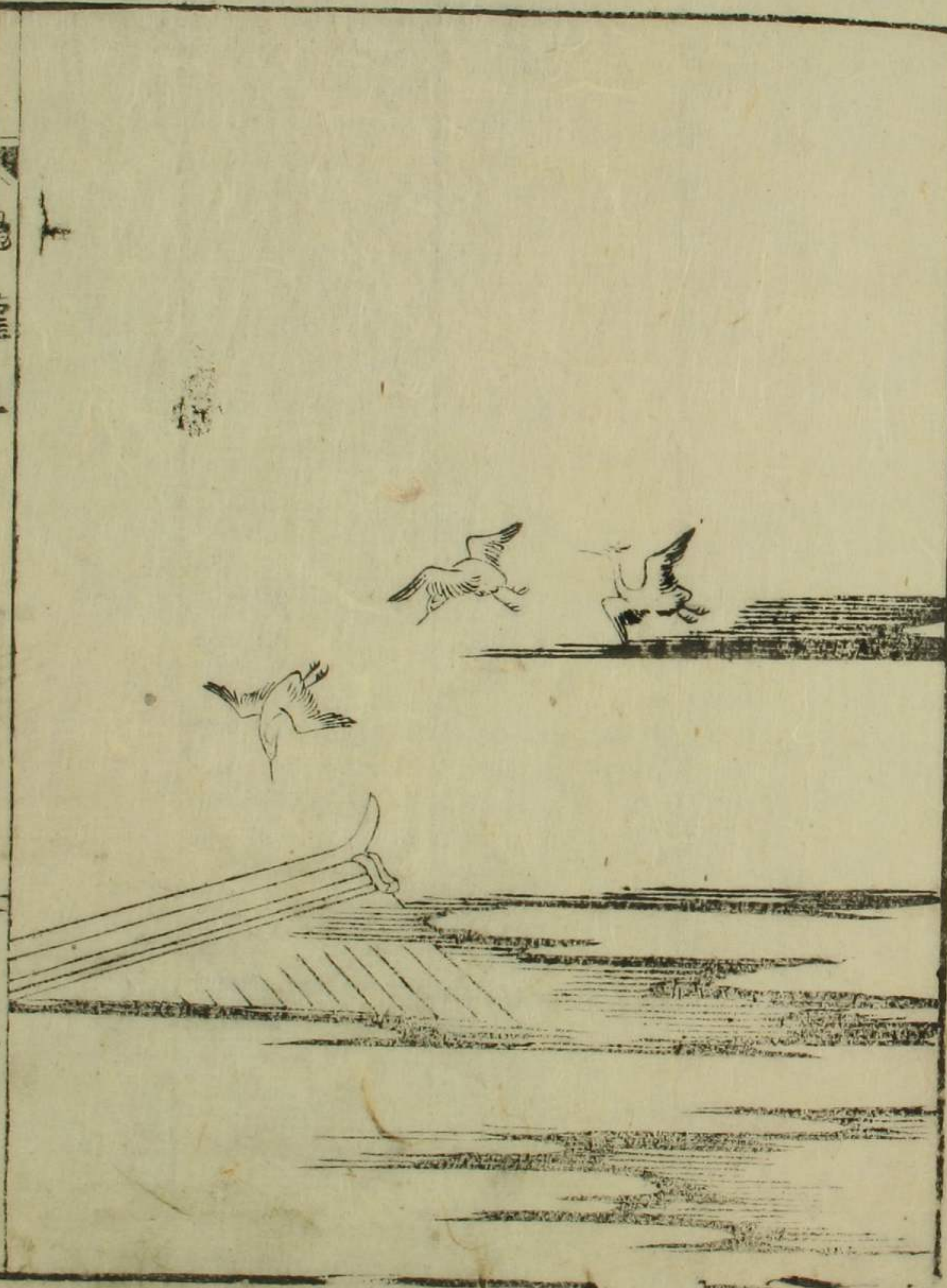
あーあれが若者さうしてさういふ
 さういふよ濃の染せんせくも人のあつて
 さういふ若者せたくまらぬ入の居風
 遠くを公持がゆりてふるいさ
 ぶー踏志あて一礼そこく先を遠の
 恥を尋ふありさして又稽留のま
 くといつて一時のさけーあまもさあ
 かやう東雲ある娘さあんのりたるよ
 影さうまらまらとんくあまらまら

何處ぞ見あらしきふ世衆の遠き
ふあつてのつちりと空なる塔の屋根
ましましき山とあきまきあがり
志やと念念ゆるばあんでも高野の金剛
山に他一の吉野の藏王堂ていあいらと
あつらを見らまじふとあつら遠のあつら
遠く生らる人家よきふ海にさる屋根
乃ニツ河のいぢふやう大坂のあつら
やうあつらと見ればせむき身は天王

寺の塔の屋根よまじふとあつら
軒を流しつゝ飛であつらとあつら
とぢ人けついで死するま何ぞつて
他とあつらと俄にうらまききて死
とあつらとあつらとあつらとあつら
と命なきけあつらとあつらとあつら
あつらとあつらとあつらとあつら
塔のうらふ人があつらとあつら
人のあつらとあつらとあつらとあつら

解判を仕るおのほろぬ程能が身のとく
心あつて十世傍りきくときがけりち
孫巻物よ土を揚つがけりちりおほきそめて
あいつと健て思まきそめてあしあや
あまうらりのちみわいせいぬりと八敷屋を
西松屋所を菊つもつるに向りし
人毎に河の高し處つごよしてあつて
のてあふイヤあきつるあつて今のうち
小凍て死ぬのときうぐいふてくるを

付耳よあつてカ候ぐこさうます
と尋よされぬあつてしちちや天王寺
乃塔のうしよ二十回めあつたあぬの布子
着る男があつてあつたあつてあつて
そのちやと天王寺いひまをぬい人だらり
あやいて思いつくあやうあつて屋文何
ても合意ゆうすとあつて天王寺
あまゆき塔のあつてあつて西門う
る人の山候くあつてあつて塔を



見あぶきいまづいもあき持肥たまけてと
 きいしくといふ斗でまけつとあけと甲斐も
 ない地人あつてあつて今いまのるよ凍こて
 ちあといふあまのむらうで後のちが一人あせう
 といふものもななく十無場じゆばう争ま張はり人ひとで志しや
 了りた知ち魚ぎよへ田い隅ぐう蒲ふ園えんを引ひきつて
 ようらうとぞもひと案あんこつといふあつといふ村むら役やく
 人ひとが立たてあつて塔たう申しん一人をまうらせえて
 来きる蒲ふ園えんを袖そで子こばいて引ひきつてたつ

けぢあやうあやうもみくドドとてあつこ
 四人がぞんあつたあやとうでまうらうとて
 蒲ふ園えんを指さりしを係せりある老人らうじんが燈とうの杖つゑ
 を持もつつもらうあつて居ゐてさうとへき
 さあまもらうの念ねんあつたあやといふあつたあ
 こ親おやにどあつといふあつたあつて
 をいつが命いのちあつたあつたあつたあつたあ
 されいあつたあつたあつたあつたあつたあ
 つ時ときは代しろとあつたあつたあつたあつたあ

日傭が一人遊ていつて成去る案者かてしと
そやうは四隅を蒲園をひらきして
うつくさばしつがいうも恐ごとのわつ
こが四隅を蒲園をわつていつて居る者の
手ごもづもろとて人々の天宮が一時の
わらわらしく死で仕業こそは院後へ今も
東寺よ四隅とつち右伝が遊てみとお儀
乃親仁の詞よ音を奏て四人あがらんと
おまをちりしは行捨ててもあられもま程

故夏本曆あつてお儀の親仁どの定て人
乃怪我せぬやうあよみ分別があつて何ん
とをせめての牛あゝ親仁うわめと聲でサヤ
わつる分別があつてもないが少と費がゆくと
云な村役人云やういあまが何のあつてきて
凍て死あが是代らいつて清儉使がゆや
あつぬそああるとよらあどのお入大深あつ
てわつるゆあつてま程結構あつてあひ人る
一人わあつて佛千体造る功徳とあつてく

穀よあるほどそお入さく得をある陰城
よもあるほどいりよも知無うして進め不
今秘変いまるげ志やいさく志ま一ばあ人
てしをあるアノ境のまて圍を志てま中一
ほくち成二三百債換科で借て来てうち
あけをよ上とさむしとさ人も換せをよとの
人もぶ登て equal 後のかくちいるうも換
ドもせよびいれよも費の切変いあつと遠
老人のち別等々感入て何をいふても凍て

死ぶ後でいせんのかいりやと丸ををさうし
をさるやう板やう釘やう方ぐつ手配一
て先ささきつ同屋へをさる人数が追くなく
ちの債をわさげらむうちよあ来上つた
圍の申へ後くおああさきい時のるお百足
山見るやうお山が出来是はうぬいと一考の
安堵助てやるといさぶやうくと等々も成
とさる死くまくと控助いさうけ件をえて
さるも嬉しそつと身法くろひしとて感

ところろが服みらう火いがぬく焼やけ死して去いりて

○賣う話わ師し曰い鹿か改かさして馬まといひもあ

鷺さぎよ人を乗のる滑すべ智ち故こ人にん桂けい常じょうよは話わを

説とく絶た妙めうを感かんをを作さく者しやの明めいふの頭かぶせよ

唐たう綱かうといふ雅が人にんあり物もの格かく星せい移いし

されば其その祥しやうあるを知しる



鳩と薩さつ雜ざつ話わ三さん

